ノンフィクション作家・探検家
角幡 唯介氏

1976年、北海道生まれ。早稲田大学在学中より探検部に所属し、太平洋ヨット航海、ニューギニア島トリコラ山北壁初登頂などを経験。大学卒業後、朝日新聞社に勤務し2008年に退社。2002～2003年、2009～2010年にチベットのツアンポー峡谷を探検し、その過酷な体験を元に書いた『空白の五マイル チベット、世界最大のツアンポー峡谷に挑む』で開高健賞、大宅壮一ノンフィクション賞、梅棹忠夫・山と探検文学賞を受賞。その後も『雪男は向こうからやってきた』で新田次郎文学賞受賞、『アグルーカの行方 129人全員死亡、フランクリン隊が見た北極』で講談社ノンフィクション賞、芦別市栄誉賞受賞、『探検家の日々本本』で毎日出版文化賞受賞など、ノンフィクション作家として実績を重ね、最新刊の『極夜行』ではYahoo!ニュース本屋大賞2018ノンフィクション本大賞、大佛次郎賞を受賞。本人ブログ『ホトケの顔も三度まで』(https://blog.goo.ne.jp/bazoooka)も好評連載中。

到達点にとらわれず一瞬の道程を大切に。僕だけの視点で探検し、そして書き続ける。

「これ以上の探検はムリ」『極夜行』は、すべての旅の総決算

編 角幡さんは学生時代から太平洋をヨットで航海したりニューギニア島の険しい山に登ったり、チベットにある世界最大の峡谷を彷徨したり、何度も過酷な探検を繰り返し何冊ものノンフィクション作品を発表してきました。そんな中、2018年に出版された『極夜行』は、北極圏の闇の中を4カ月にわたって旅をした記録ですが、北極や南極では、太陽が沈まない「白夜(びゃくや)」の反対で、何日も夜だけが続く「極夜(きょくや)」というのがあるんですね。初めて知りました。

角幡 何度か北極を訪れて、考えたんです。暗闇の中を何カ月も歩き続けた後、ようやく極夜が明けて地平から昇る太陽を目にしたときどんな気持ちになるのか、何が見えてくるのか。それを確かめてみたいと思いました。

編 それにしても壮絶な旅だったようですね。角幡さんご自身も本の帯に書かれていました。「これ以上の探検はムリです」と(笑)。

角幡 『極夜行』の旅には、それまでの活動の総決算のつもりで挑みました。準備にもじっくり時間をかけて。

編 何年も前から準備を始めたそうですね。

角幡 2012年から実験行・偵察行を重ね、旅の途中で必要になる燃料や食糧をどの地点にデポ(貯蔵)しておけばいいかなどをじっくり検討し、2015年には、ルートを辿ってそれぞれの場所に保管庫を設置してきました。

編 そして翌16年。極夜の期間を狙って、犬一頭と我が身一つで、いよいよ本番の旅に出たわけですが、著書を拝見すると、探検半ばにして、せっかく準備した食料保管庫がシロクマに食い荒され、闇夜の中で窮地に立たされてしまったとありました。文字通り“一寸先は闇”、なんですね。

角幡 確かに、実際には計画通りにいかないことばかりで、生死を分けるようなアクシデントの連続だったのですが、そのぶん、誰にも体験できないような深い旅になったのではないかと思います。

編 探検家であり作家でもある角幡さんの場合、命懸けの旅をしておしまいではなく、それをノンフィクションとして本にまとめるところまでが旅、のようなものですよね。想像を絶する体験を、読者が想像できる形で表現するのは、また別の意味で、身を削るような作業なのではあり

ませんか？

角幡　『極夜行』って、結局ずっと暗いだけの旅なんですよ（笑）。ちょっとだけ月明かりや星明かりが見えるくらいの世界。だから見たままを書いても何もないわけです。むしろその闇が自分の心にどう映ったか、それをどういう言葉にするかを意識しました。日々の記録は日記のように、ただ起きたこと、思ったことを断片的に書きとめるだけで、たまに、いい表現を思いついたらそれをランダムにメモするくらいのものです。帰国してから作品としてまとめるときにメモを整理し読み返し、このときの出来事、このときの心理状態を、どういう言葉、どんな文体で表現したら、自分が目にした世界、感じた世界を生き生きと描けるか。それだけを考えて文章にしていきます。『極夜行』では、「伝えたいことを伝えきれた」「読者に旅の追体験をしてもらえるのではないか」という手応えがありました。

文明というシステムの外へ飛び出せ 探検は、肉体を使った批評的表現だ

編 読者に、とくに伝えたかったのはどんなことですか？

角幡　僕はね、文章表現以前に、そもそも探検そのものが表現だと考えているんですよ。ある種の批評的表現。肉体を使った批評、と言えばわかりやすいでしょうか。本の中で「脱システム」という言葉を使うことがあるんですが、この場合の「システム」とは、時代の常識とか、我々の思考や行動を秩序立てている大きな力、体系みたいなものを指します。テクノロジーも含めて、文明的なものに支配されている範囲の外に飛び出すのが、探検や冒険だと思うんですね。外に飛び出すということは外の目線を獲得することであり、内側に対して何かを批評的に見る視点が伴うわけです。

編『極夜行』にも、当然そうした視点が生きていると。

角幡　例えば『極夜行』の中には、システムの外に飛び出した状態で星を眺めることで、星はすごく個性的なものなんだと気づく瞬間の話が出てきます。そもそも星が個性的だなんて、システムの外に出ないと気づかないわけですよ。システムの内側にいたときには、きれいだなくらいにしか思わない。しかしGPSも持たずに極夜に飛び出したとき、星は、自分の進む方向を指し示してくれる重要な光になってきます。すると星が急に愛おしくなり、単なるガスとか岩の塊じゃない有機的なものとして擬人化したくなり、あれこれストーリーが思い浮かんでくるんです。大昔は、星と人の間にもっともっと深い関わりがあったから、さまざまな神話が生まれたんでしょうね。そんなこと、極夜をさまよう前は考えもしませんでした。

編 月の場合はどうなんでしょうか。

角幡　月も同じです。月の明かりは、外の世界、暗闇の世界では命に関わるほど重要なものなので、さらに関係性は強まりますね。ですからときには月に対してムカついて毒づいたりもする。そんな様子もすべて『極夜行』に書いてあります。

編 ありがたいとか心強いとかだけでなく、ムカついたりする気持ちもすべて含めて、本当の親近感なんでしょうね。

角幡　つまり、管理されたシステムの中にいるときって、一つの例として「月や星、自然と人間との関わりがほとんど消えかけてしまっている」ということなんですね。それが

極夜行

極地で起こる、太陽の昇らない現象「極夜」の中を4カ月間、犬を伴い自らそり（そり）を牽きながらひたすら歩く。周到に用意したにもかかわらず、次々起こるアクシデントや予想もしない天候に、ルートや日程の変更を迫られる。極夜が明け、旅の終わりに見た太陽の輝きは？

文藝春秋

あたりまえになってきた現代社会の中で、「システムの外に出てみたら星や月がこんなふうに見えた、こんなふうに感じられた」と文章化し作品化することによって、間接的に、月や星と人間の付き合いが完全に切れてしまっていることへの批評になるわけです。先ほども言いましたが、僕は、冒険・探検という表現手段の本質は、こういった批評性にあると考えていて、それは今回の『極夜行』にも充分に盛り込めたのではないかと思っています。

編 表現の裏にある批評性をどこまで読み取れるかは、読者個人の感性によって違ってくると思いますが、角幡さんが「極夜」に対して抱いた畏怖や畏敬の念のようなものは、まるで自分が体験したかのようにリアルに伝わってきました。そのインパクトが、システムの内側にいる現代人の心を突き動かしたのでしょう。『極夜行』はみごと大佛次郎賞を受賞して、さらに、Yahoo!ニュース本屋大賞に初めて設けられた『ノンフィクション本部門』で大賞を受賞するなど、ネットの世界でもリアルの世界でも大反響を呼びました。

「成果や効率」とは別の価値観を自らの行動で世の中に示したい

編 一つの探検、作品が高く評価され大きな賞を受賞するというのは、やはり次の挑戦にとってプレッシャーになったりするのですか？

角幡　受賞などには関係なく、年齢的にも40歳で『極夜行』の旅を終え、区切りがついた感もあり達成感もあり、その反動で脱力してしまい、一時は、まったくやる気を失っていました。次に何をやればいいのかわからなくなって……。

編 でも、その後も何度か北極圏に行かれていますよね。

角幡　『極夜行』で一緒に旅した犬をグリーンランドのシオラパルクという村に預けていたので、行かざるを得なかったんです。次の旅の形も定まっていないからそのまま日本に連れ帰って来ようかとも思ったんですけれど、犬と一緒にそりを引きながら歩いているときにパッとひらめいた瞬間があって。新たな探検のイメージが明確になり、一気にモチベーションが高まったんです。

編 鮮明になったのは、どんなイメージだったんですか？

角幡　一般的に、冒険・探検と言えば、エベレストに登りたいとか、何か到達点を決めてそれに向けて頑張るというものだと考えられているじゃないですか。僕は、そうじゃない探検をやりたいんだと。

編 これまでもそうした気持ちがあったけれど、もっとその意識が強くなったわけですね。

角幡　到達点を目標にしちゃうと、どうしても途中の過程が疎かになっちゃうんですよ。最後の結果ばかりを見てしまうから。よく例に出すんですけれど、カーナビやGPSを使うと道を覚えにくくなるでしょ？画面だけ見て指示通りに動いていると、周りの風景にほとんど意識がいかなくなるもんなんですよ。カーナビがない時代だったら、「このガソリンスタンドの角を右に曲がる」とか「あの信号は○○交差点という名前だった」とか、リアルな風景の中に目印を設定していたのに、それがほとんど無意味なものになってしまっています、最近は。

編 探検でも、似たような現象はあるんですか？

角幡　これは極地でも同じことで、GPSに頼ると「目的地

まで500kmあるから１日何km進めば到達できる」と計算し、その数字ありきで計画を立て、それをいかに効率よくこなしていくか、ということばかりに意識がいってしまうんですね。目標達成への近道を行くことしか考えず、途中の過程はただ通過するだけ。実際現場に行くと、思ってもみなかったことが起こるのに、そこにはできるだけ無駄な時間をかけず、とにかく目標へ向かって突き進もう、ということになってしまうんです。

編 いまは日本中が「効率だ成果だ」という雰囲気ですよね。

角幡　世の中の風潮って全部そんな感じで、目標だけ求められて、子供のときから「落ちこぼれないためにはこうしなければならない」「いい仕事に就くにはこうするべきだ」みたいなことばかりじゃないですか。そんなこととは違う価値観を、僕は冒険という行動を通じて世の中に提示したいと常々考えていました。

編 しかし、極地へGPSを持っていくのがあたりまえの中で、角幡さんはあえて持っていかず、冒険の過程の一瞬一瞬を大切にしていらっしゃる。この上さらにシステムの外へ飛び出していくとなると…

角幡　それで思いついたのが「狩りをしながら旅をすること」なんですよ。

「狩り」には、旅の未来を変えていく創造的なダイナミズムがある

編 『極夜行』の中でも、頼りにしていた食糧がシロクマに荒らされて、狩りをして飢えをしのいで生き延びるというエピソードがありましたが、切羽詰まっての狩りではなく、今度は、予定したコースに食糧をデポしておく代わりに、自由に狩りをして気ままに旅をしようということですか。

角幡　狩りをして獲物を獲ったら、そのつど食糧が確保でき、旅の期間を延長できますよね。あらかじめ保管庫に用意しておいた食糧でどこまで行けるかという、これまでやってきた旅とはまったく違い、そのときその場の状況によってどんどん未来が変わっていく、新たなダイナミズムが生まれるわけです。狩りを前提にすることで、自分のやりたい旅、自分にしかできない旅ができるようになるんじゃないかと考えたら、『極夜行』以降の脱力感が吹き飛んで、俄然やる気が湧いてきました。

編 狩りをしながら旅をするということは、装備も変わってきますよね。

角幡　『極夜行』のときは犬一頭を連れて自分でそりを引いて歩いていましたが、狩りをするには犬ぞりが必要になってきます。犬ぞりだと機動力が全然違いますから。それでまず犬を十頭集めるところから始めて、いま懸命に訓練をしているところです。

画像は角幡氏のTwitter @kakuhatayusuke より

編 十頭の訓練をお一人で？

角幡　その前に、まず犬を集めるのが大変でした。いまはイヌイットの人たちも昔のようにたくさんの犬を飼っていないですからね。僕みたいな外国人が行っていきなり犬を売ってくれと言っても簡単には手に入らないんです。ようやくかき集めたのはいいけれど、犬がなかなか言うことを聞いてくれない。毎日怒鳴って、妻との電話でも犬への不満をぶちまけて怖がられ（笑）、反省して「明日は犬たちに少し優しくしよう」と思うんだけれど、また目の前で勝手にあちこち歩き回られるとブチ切れて（笑）。そんなことの連続ですよ。今年に入り、できるだけ多くグリーンランドを訪れ、犬ぞりの訓練を続けています。

編 予行演習なども始めているのですか？

角幡　犬にそりを引かせる訓練を一通りやり終えたところで、試しに一度100kmほど離れた無人小屋へ遠出してみました。そういうことを何度か繰り返して、１カ月間、北に向けて移動してみたんですが、まあ普通は何年もかけてやることを短期間でやろうとしているのでキツいのはキツいんですけれど、その１カ月の移動の中で「狩りを前提に旅をする」というヴィジョンがかなり明確になりました。１年のうち半分くらい、犬ぞりを使った旅をする。それを５年くらい続けていけたらいいなと考えています。

獲物を追い、ネットワークを拡げ
狩猟者の目で「自由な地図」を描きたい

編 もう何度か狩りの実地訓練はなさっているんですよね。

角幡　やっています。主にアザラシ狩りですね。

編 狩りをすると何か意識が変わったりするものなのですか。

角幡　最初にアザラシ狩りをしたときに感じたのは、自分が、単なる冒険者でなく狩猟者の視点になっているということでした。アザラシのたくさんいる場所というのはかなり北の方で、前回の旅でも訪れているのですが、同じ土地なのにまったく見え方が違ってくるんですよ。とくにいい場所だという印象もなかったのに、狩猟者である自分にとっては、アザラシがいるからそこは「いい土地」なんです。そして「もっと北の谷に行けばもっと新しい獲物がいるのではないか」と欲が出てくる。単純な話に思えるかもしれないけれど、狩猟者の視点で見ていると、地図に描いてある「地形」とは別に、獲物の情報が大きな意味を持ってくるんですね。地図には、アザラシがいるかどうかなんて載っていませんから。

編 狩猟者になると、意識がイヌイットの人たちに近づいていく、ということなんでしょうか。

角幡　実は、イヌイットの人たちがみな昔のままかと言うとそうでもなくて、100年前にやれていたことができなくなっている、ということもよくあるんです。たとえばシロクマ狩りなんてもうほとんどやっていない。現在50～60歳くらいまでの人は、シオラパルクから氷床を越えて犬ぞりで1カ月くらい旅をしながら狩りをしていた人たちで、ちょうどその息子たちがいま村の主力の世代なんだけれど、残念ながら彼らに、親たちの技術がうまく継承されていないんですね。

編 まさか狩りができなくなっているとか？

角幡　いや、若い世代も狩りや犬ぞりは上手なんですよ。ただし、旅をするという経験がない。経験がないからノウハウもない。最近では、春になって氷が溶けるとモーターボートで狩りができて、近場でアザラシやセイウチが獲れるんです。シロクマも頭数制限がかかるようになり、毛皮をたくさん売ることもできず経済的なうまみもないから、お父さんたちも狩りの旅に行かなくなって、冬の間は家でゴロゴロしている。だから子どもたちに受け継がせようがありません。北の果ての地域の食糧小屋も誰も使わなくなって廃れてきていて、いまは僕が使っているだけなんです。気がつくと北の果ての土地に誰もおらず、僕一人でウロウロしていると（笑）。そうすると「ここは僕の土地だ」という感覚になるんですね。

編 村の人に怒られたりしないんですか？

長さ3メートルほどの大きな捕虫網のような道具をつかいアッパリアス（ヒメウミスズメ）と呼ばれる水鳥を捕獲する角幡氏。捕獲した鳥は干し肉にする。

画像は角幡氏のブログ「ホトケの顔も三度まで（https://blog.goo.ne.jp/bazoooka）」より

角幡　その逆で、村に帰ると地元の人に「シロクマはいたか」「狼はいたか」などと訊かれるんですよ。だからこっちも「あの辺りにたくさんいたよ」と教えてあげる。そんなふうにいろんな土地の知識を蓄えることを徹底していって、自分の場所をどんどん増やしていき、それらをネットワーク化し、自由自在に旅して歩ける“新しい地図”をつくっていけたら、狩猟者として理想的じゃないかなと思っています。

書きたい気力がある限り
旅も探検も続けていける

編　40歳を超えてからの新たな挑戦に、体力的な、あるいは精神力的な不安はありませんか？

角幡　身体はある程度鍛えているので、一般の方よりは衰えが少ないとは思いますが、やはり若い頃と比べれば力の差を感じますよ。でも、これから大事になってくるのは気力ですね。内側から湧いてきた発想を、実行してみる気になるかどうか。40歳過ぎると自分の中の経験値がどんどん大きくなってきますから、想像力がついてきて、壮大な計画を思いつくものなんです。30歳では人生経験が足りなくて思いつかなかったようなことを。だけど、せっかく思いつくんだけれど、そこそこ体力はあっても気力がじわじわ衰えてくると、計画を行動に移すのがしんどくなってくる。そういう傾向が、一般的に42～43歳あたりで強まってくるんじゃないでしょうかね。僕も、一時はそうなりかけていました。

編　「思いつく」は易く「行なう」は難し、ですか。

角幡　だけど思いつきというのは、実はそんなに軽いもんじゃなく、それまで自分が歩んできた人生のすべてが詰まっているものだから、それをやらないというのはあまりにももったいない。逆に言えば、わくわくするような思いつきを実行できなくなったら探検家としておしまいなのではないかと思うんです。

編　システムの外に飛び出す力がなくなってしまう、ということなんでしょうかね。

角幡　僕には、わりと行き当たりばったりなところがあって、ぱっとひらめいて計画を立てるんですが、計画通りに進んだためしがありません。つねに軌道修正しながら、一瞬ごとに湧き上がってきた思いに忠実に生きてきました。そうやって人生は展開していくんだなって最近気づいたんですよ。自分の過去から生じてくる波に積極的に飲み込まれ、波の内側から溢れ出てくる何かに従って生きていると、他人の考えとか世間の評価とかいろんなことがどうでもよくなってくる。40歳過ぎる頃になるとだんだんその気持ちがはっきりしてくる。それが自由な生き方に繋がるんじゃないかと思うんですね。

編　もう40歳、ではなく、まだまだ40歳でしょう。これからも、あっと驚く大冒険を期待しています。

角幡　僕の場合は探検家であり作家でもあるので、体力や気力が少々減退してきても、書くことがすごく大きな力になってくれるんですね。「伝えたい」「表現したい」という思いが自分の背中を強く押してくれますから、まだまだ旅を続けられるだろうし、それを探検記にまとめていけると思いますよ。